

battle at ocean

the days after : Kyo & Toga

南海の大決戦！

どこまでも青い空と青い海。ありふれた景色が、かけがえないものであると知れば、世界は違ってみえる。

最終作戦とされた戦いの後もガルズオルムの残存部隊との戦闘は続いていた。ドヴァールカーの前方視界に広がる海を眺めながら、イゾラは膝に抱いた子犬のピエタの頭を撫でていた。この子犬は、舞浜サーバーでアークが買い求めたものだ。だとクリスは言っていた。愛妻を失った彼は、彼女の遺言を守って、毎日ピエタに餌をやっている。

あの戦いの後は、まるで世界が変わってしまった。ガルズオルムの月面基地ジフェイタスの破壊と引き換えに、セレブラムの一艦オケアノスとシマ司令は失われた。

オケアノスのクルーの一部が避難した舞浜サーバーは、月面に隠されていたホロメモリが回収され、月面で戦っていたオケアノス所属のゼーガペインと共に、今はドヴァールカーに収容されている。

ドヴァールカーに帰艦したクリスをクルーは歓迎した。彼がウィザードに伴っていたメイイエンは、同い年のメイヴェルとすぐに仲良くなった。だが、今一人加わったガンナーが、イゾラの頭痛の種になった。

ソゴル・キヨウ。この世でただ一人、リザレクションシステムで肉体を取り戻した人間である。

オケアノスのゼーガベイン・アルティールのガンナーであるキヨウは、同じアルティールを駆るトガと何かと衝突していた。数日前、それが一つの事件に発展した。

キヨウとトガは、ウィザードを伴わずにそれぞれのアルティールでドヴァールカーを出て行ってしまったのだ。

《量子転送を使わずに、我々の目を盗んで本艦を出て行くのには、お二人は協力しているようなのですけれどね》

艦長A Iのレムレスが苦笑を交えて報告した。

《意気投合できればこれほど頼もしい存在もありません》

タルボが言うのも分からないでもない。

「常にそうならありがたいが、まずありえないからな」

イゾラは小さく息をついて、待機中のクリスに二人を追わせることにした。——とところが。

《アルティール二機の現在地は特定できましたが、付近に転送障害が発生しています》

リチエルカの報告に、イゾラはぞつとした。

ゼーガベインの操縦系は、ガンナーとウィザードの二人が乗り込むことでその実力を発揮する。トガとキヨウのアルティールにウィザードを送り込めないまま敵機に遭遇しては、生還の可能性が低くなる。そしてクリスのプリスベルグも、二機から離れた地点にしか転送できない。

幻体であるトガはともかく、キヨウの肉体には確実な危機が迫っている。シマ司令から託された大切な命を、イゾラは失うわけにはいかなかった。

トガとキヨウが転送障害に気付いたのも、海上で敵機を発見するのと同時のことだった。ガルズオルムの大型機、オーヴアルが複数居ることで転送障害が発生したらしい。

一人でやるしかないか、と奥歯を噛みつつゼーガA Iに装備させていたランチャーを撃つ、キヨウの目の前でトガの援護射撃が同じオーヴアルに炸裂した。

「大物はお前がやれ、細かいのは俺が落としてやる」

トガはそう告げて、キヨウの機体の背後に迫っていた小型機のウルヴオーフルを撃ち落としてくれた。

的が大きければウィザードなしでもやれるとはキヨウにも分かっていたが、ガンナーだけでも小さな敵機を的確に落としてみせるトガは凄い。でもそれが、気に食わない。

結局二人だけでその場の敵機をほぼ撃退し、駆けつけたクリスは数機の撃墜だけで戦闘は終わった。

「君たちにはアルティールのガンナーとしての自覚はないのか！」

帰艦した二人を迎えたのは、イゾラの雷だった。

「自覚があるから、義務は果たしたろ」

なあ、と珍しくキヨウに同意を求めるトガの顔をちらりと見て、キヨウはイゾラに正面から言い切った。

「撃ち合いになる前、トガはオレには戻れって言うてくれた。トガは悪くない」

トガは確かに言うてくれたのだ。なのにその場を離れられずに、こちらからの第一射を放ったのはキヨウだった。

「いや、キヨウがああのタイミングで撃つてくれたから、俺達は二人とも帰艦できた」

かばつてくれるトガを、キヨウはまじまじと見た。司令席のイゾラは目蓋を伏せてふうと息をついた。

「現場の判断が優先されるといふのはいい。問題は、そもそも何故勝手に離艦して、しかもウイザードを連れて行かなかったのかということだ」

「いやだからそれは……」

「その場の勢いつて奴で」

トガとキヨウが弱った声を合わせるのに、イゾラはいよいよ頭が痛くなった。

「トガはともかくとしてだ、キヨウ。——君の行動は軽率すぎる」

痛いところをつかれて、キヨウは唇を噛んだ。
「まあ、俺は一人でも問題ないしな」

「だからお前には言うても無駄だ、という意味だ」

トガの鼻柱をへし折ったイゾラは、キヨウに言った。

「君の心のどこかに、トガに負けたくないという気負いはなかったか。向上心を持つのは良い、だが君の体は君一人のものではない。君を案じてやまない者が沢山いることを忘れてはならない」

キヨウは殊勝にはいい、と頷いた。イゾラに言われたとおりのことだからだ。

「キヨウはちゃんと分かっているさ。だから、もう良いだろう、イゾラ」

「キヨウは良くて、お前は良くない」

イゾラはぴしゃりと saying、厳しい目で睨みつけた。
「二人とも謹慎処分。隔離領域でおとなしくしている」

了解、と沈んだ声で二人は一緒にうなだれた。

トガはセラブアイコンを開いてその場から消えた。キヨウも自室に戻って、ブリッジは静かになった。

「喧嘩をするほど仲がいいにも程がありますね」

副司令のムエージェが評するのに、イゾラは言った。
「あれは、今に始まったことではないからな」

「キヨウが来てからこちら、休む間もありませんよ」
ムエージェのぼやきに、イゾラは首を振った。

「もっと前からだ。——ベガのトライアルがあつたらう」
「ああ、あの幻のゼーガ……そんな前からですか？」

イゾラが言うのは、ホロニックローダー開発の初期の話だ。汎用機として設計されたアルテイルをベースに、強襲型として特化された性能を求められた機体には、へ舞い降りる鷲を意味するベガというコードネームが付けられた。シミュレータでのベガのトライアルには、各母艦のアルテイルのガンナーが参加した。だが彼らの実力を持つとしてもベガは実戦に投入するには様々な問題があるとされ、開発は中止となつた。

そのベガのトライアルは、個々のデータを伏せて行われた。無用な軋轢を避けるためである。だが、隠されたものは暴きたくなるものだ。彼らは個々に結果を突き合わせてパズルを解き、勝敗表を明らかにした。

結論から言つて、彼らの実力に大きな差はなかった。それが目に見えていたからこそ、結果は最初から伏せられていたとも言えるのだが。

キヨウはトガに負けていた。

トガは、ルヴェンゾリのゲイルに負けていた。

そのゲイルを負かしていたのが、キヨウだった。

この三すくみを面白くないと思つたトガは、その後奮戦を重ねて突出した数字を出すようになっていった。

「そうやってウチのエースを育てたのも、シマ司令お得意の織り込み済みだったんですか」
さあな、とイゾラははぐらかした。

月面攻略戦で受けたダメージは、トガから多くの記憶を奪つた。そして彼の前に現れた敵との戦いを通じて、トガは今の自分を受け入れていった。ベガのトライアルのことなど、忘れてしまつていた。

同じ月面で自爆の末にリブートされたキヨウは、その折にはトガと同様に記憶の多くを失つた。だがリザレクシオンシステムで肉体を取り戻したキヨウは、全ての記憶を取り戻してしまつていた。

互いに面識がないまま出会つた先の最終作戦でも、とにかく相手が気に入らなかつた。元をたどればベガのトライアルに行き着くのか、とキヨウは思い出してしまつたのだが、今となつてはいい思い出になつてしまつている。

折角同じ艦で過ごすことになつたのだから、トガと仲良くやりたいとはキヨウも思つたのだ。だからあのトライアルの件を昔話に持ちだしたのにトガは覚えていなかった。

——共有していた記憶を相手に失くされる痛みつて、こういうものなのか。

キヨウはそれを、寂しいと思つた。